

## 1980年代『平凡』における読者意識の形成と若者文化

— 「たのきん（トリオ）」に熱狂する読者等と廃刊をめぐる —

The formation of Readers conscious and youth culture in Popular Magazines for  
Amusement “HEIBON” during of the 1980’s

— the most varieble talents of “TANOKIN” heated of the young readers and  
focused to be discontinued of publication of the magazines of “HEIBON”—

田中卓也  
Takuya TANAKA

### 概要

「たのきん」と呼ばれる3人の男性アイドルは、『平凡』誌上最後のアイドルとして、人気を誇った。ファン等はこぞって同誌の読者投書欄に投書を寄せ、「その思い」を伝えた。たのきん人気が去ってからは、読者投書欄は読者同士の文通や交流、誌面でのやりとりが中心となった。いつしか読者等は目には見えない読者共同体を形成していった。それはやがてアイドルを標榜する読者の集いから、彼等読者が日常通学する学校へと目が向けられた。それは「校則」への批判、反発というかたちで、読者個人の思いが投影されるものとなっていった。それは『平凡』誌の読者欄が彼等ヤング（若者）の居場所であり、そこで作られる主義主張などは、「ヤング共同体」としてのディスクールを有した。

キーワード：大衆娯楽雑誌、アイドル、読者、たのきん（トリオ）、『明星』

### Abstract

The most varieble talents of “TANOKIN” were the last idolized singers in youth culture in Magazines for Amusement “HEIBON”. The fan of TANOKIN were written by contribution to desire harder. The popularities of dates of public opinion in TANOKIN, “HEIBON” magagines readers were exchanging letters with between me and the othe other readers. Someday, it became to form of the readers communities of “HEIBON” magazines in conjecture (guess). it changed the talents adomired of readers of “HEIBON” magazines from school boys and girls students teens in ordinary lives.

The magazines of “HEIBON” were abangared whileseemingly “HEIBON” targeted urban and rural readers. It was not their schools regurations, arally, and so on, arefrection their thought of readers in personarities.

As a results, It was merked that thier thoughts, principals, assertions, in their readers columns their magazines of "HEIBON".

**Keywords:** popular magazines for amusement, idol, readers, the most entertainer of "TANOKIN", "the MYOJO"

## 目次

- 1 はじめにー本研究の目的と先行研究の検討ー
- 2 雑誌『平凡』について
  - 2.1. 平凡の誕生
  - 2.2. 戦後がうんだ二大大衆娯楽雑誌ー『平凡』と『明星』ー
- 3 1980年代アイドル「たのきんトリオ」(田原俊彦、野村義男、近藤真彦)の登場
  - 3.1. 一世風靡したアイドルグループ「たのきん」
  - 3.2. 「たのきん」が残した功績
  - 3.3. 平凡の表紙における「たのきん」の登場回数
- 4 読者投稿欄「ヤングスクエア (young square)」の設定
  - 4.1. 投書欄「いいたいほうだい」と編集部「オヤサン」の存在
  - 4.2. 読者のページ「ヤングスクエア」の変化
- 5 「たのきん」中心の誌面構成
  - 5.1. 身近な存在としての「たのきん」ー学校でデートから誌面でデートへー
  - 5.2. 「たのきん」人気の凋落ー歌番組の終焉と後輩アイドルの登場ー
- 6 おわりにー『平凡』廃刊とジャニーズ系アイドルの量産ー
  - 6.1. 読者投書欄「Super me ☆ her」の新設と“スクールライフ”を中心とした読者交流
  - 6.2. 『平凡』終刊へ

## 1 はじめにー本研究の目的と先行研究の検討ー

本研究は、平凡出版(のちのマガジンハウス)から発刊された若者を対象とした大衆娯楽雑誌『平凡』をとりあげ、同誌の誌面を検討するとともに、当時の読者に焦点をあて、読者意識がいかにか形成されたのかについて明らかにするものである。

これまでマス・コミュニケーション研究の分野では、雑誌の読者欄や、そこでの投稿・投書によって、読者同士または読者と編集者との間のコミュニケーションがいかにか行われていたかに焦点を当てた研究は蓄積されている。田島悠来は、『平凡』を主な分析対象とする研究の蓄積は未だになされていない。一方で、『明星』は、同時期に人気を博した雑

誌『平凡』（平凡出版、1945年創刊）とともに、戦後日本を代表する「大衆娯楽雑誌」として、男女ともに、広く「若者たち」に読まれていたことについて詳細な考察・検討を試み、読共同体の存在について確認している<sup>1)</sup>。

また阪本博志は、『平凡』について取り上げ、とりわけ1950年代の同誌が戦後大衆文化の原型として機能し、その読者である働く若い男女の間に編集者も交えた連帯意識が形成されたと述べるとともに、そこでは読者参加型のもと、編集者からの一方向のコミュニケーションのみならず、読者との双方向なコミュニケーションが生みだされていたことを明らかにしている。阪本の研究は、特に読者欄に焦点を絞ったものではないため、本研究とは視点を異にすることになる。しかしながら、「大衆娯楽雑誌」というメディアにおいてどのようなコミュニケーションが展開されてきたのかを歴史的に見ていく点では示唆を有するものである。阪本は、1970年代を一つの転換期として、『平凡』や『明星』といった「大衆娯楽雑誌」が「アイドル誌」へと様変わりする点、あくまで戦後大衆文化の原型としての『平凡』に議論の力点が置かれているのみである<sup>2)</sup>。

いずれにせよ「たのきん」は、平凡最後の大物アイドルグループとして登場し、アイドル栄華時代を極めた。しかしながら次世代アイドルの登場により、彼等の人気は低迷し、それとともに同誌も廃刊の道に進むことになった。

## 2 雑誌『平凡』について

### 2.1. 『平凡』の誕生

『平凡』は第二次世界大戦後まもない1945（昭和20）年10月に、岩堀喜之助を代表とし、清水達夫を編集長とした、合資会社凡人社を創設したことに始まる。凡人社はのちに1964（昭和39）年に平凡出版株式会社、1983（昭和58）年にはマガジンハウスと解消し、現在に至っている。岩堀はもともと『陸軍画報』の発行人であった中山正男から用紙権を、さらに平凡社創業者であった下中弥三郎より「平凡」という登録権について譲り受けており、同年11月より創刊号が発行された。創刊号は、A5版のもので、中途半端な娯楽雑誌であった。戦後の用紙事情から、1947（昭和22）年まで『平凡』は毎号刊行されてはいなかった。しかしながら文芸娯楽雑誌であったが、グラビアが誌面に登場していたこともあり、その後の『平凡』誌に繋がっていく素地が見られたといえる<sup>3)</sup>。

### 2.2. 戦後がうんだ二大大衆娯楽雑誌－『平凡』と『明星』－

先述の田島によれば、1948（昭和23）年に創刊していた雑誌『平凡』（平凡出版 現マガジンハウス）の人気を受けて、ライバル誌『明星』は「夢と希望の娯楽雑誌」をキャッチフレーズに児童雑誌に定評のあった小学館を母体とし、中でも「趣味娯楽部門」に特化

した役回りを担っていた集英社から1952年に創刊された<sup>4)</sup>。

また阪本は『平凡』とともに、『明星』は戦後を代表する「大衆娯楽雑誌」となった。創刊当初の『明星』は、主婦之友社の雑誌『主婦之友』において“名編集長”として名を馳せた本郷保雄を編集長として迎えることで、元来児童雑誌主体の編集体制の中に、本郷が婦人雑誌編集で培ったノウハウの取り込みが図られ、「大人が読んでも子どもが読んでも面白い子供雑誌」という方針や読者対象として特に高校生以上（年齢的には16歳から20歳ぐらいまで）の女子を想定した雑誌作りが念頭に置かれていた。創刊から先述のように『平凡』と「大衆娯楽雑誌」として両翼を担うことになった。

『平凡』は1987（昭和62）年12月号をもって惜しまれつつも廃刊となった。しかしながら明星は1992（平成4）年に「MYOJO」と改称し、現在においてもジャニーズの記事やグラビアを中心に発行を続けている。



たのきんが表紙となった『平凡』誌

### 3 1980年代アイドル「たのきんトリオ」（田原俊彦、野村義男、近藤真彦）の登場

#### 3.1. 一世風靡したアイドルグループ「たのきん」

80年代アイドルグループに「たのきんトリオ」（以下、「たのきん」と略記する）が知られていた。「たのきん」とは、田原俊彦（トシちゃん）、近藤真彦（マッチ）、野村義男（ヨッチちゃん）の3人のジャニーズアイドルによるグループ名である。1980年代前半に活躍した3人であった。ただし正式なユニット名ではない<sup>5)</sup>。

いずれも1979（昭和54）年放映の武田鉄矢主演のTBS系ドラマ『3年B組金八先生』の第1シリーズに生徒役で出演していたことがきっかけである<sup>6)</sup>。金八先生の出演に続き、同年5月に放映を開始したフジテレビ系ドラマ『ただいま放課後』で、彼等3人の人気はますます加熱することになった<sup>7)</sup>。彼等の人気ぶりは折り紙付きのものとなり、ドラマの放映回数も当初の予定より延長されることになった。またジャニーズ事務所所属のアイドルグループとして結成され、相次いで歌手デビューすることになった。「たのきん」の名はジャニー喜多川が発案したとされ、「プチセブン」誌上で広められた。しかし、ライバル誌の「セブentyーン」は旧来の「悪ガキトリオ」の呼称を通し続けていたという。

1983年8月28日の大阪球場コンサートをもって解散した。

「たのきん」の登場直前まで、ジャニーズ事務所においてエース格の扱いを受けていた所属タレントは、プロマイド売上NO.1にもかかわらずアイドル冬の時代もありヒット曲には恵まれなかった川崎麻世だった<sup>8)</sup>。テレビ番組や雑誌では他事務所所属の渋谷哲平(川崎とはNHK『レッツゴーヤング』でサンデーズの一員として共演していた)とセット売りされる事も多く、合同コンサートも幾度か開催していた。1980年初頭には「80年代に期待できる男性アイドルはこの二人」と彼らの合同コンサートを取り上げた雑誌記事もあった。しかし1980年初夏ごろを境に、テレビや雑誌などメディアにおけるプッシュ及び、マスコミやファンからの注目や人気の対象が一斉に「たのきん」に切り替った。結果、郷ひろみの移籍に始まり、ニューミュージック時代到来による新御三家以外の男性アイドルに逆風が吹いていた状況、フォーリーブスの解散、VIPの主要メンバーの脱退及び退所や解散、豊川誕の退所、新人や新ユニットの不発が重なっていたジャニーズ事務所の低迷期を一気に打破する事となった。ジャニーズ事務所低迷期に、自転車で各テレビ局間を移動して自社タレントを売り込む毎日だったジャニーズ事務所副社長(当時)のメリー喜多川が獲得した仕事が『3年B組金八先生』であった。

松田聖子とともに賞レースでも活躍し、1970年代後半のニューミュージック一辺倒の風潮を一気に塗り替えた、新たなる時代への幕開けの象徴であった。たのきんの3人それぞれが、デビューした年の『日本レコード大賞』などの音楽賞で最優秀新人賞を受賞している。以後のジャニーズ事務所は急成長を遂げ、ジャニーズ Jr. が人気アイドルのバックでの顔見せを経てデビューするという一時期途絶えていたシステムも復活していくことになった。なおその後、シブがき隊や少年隊などが次々とデビューした。



(上段) たのきん東宝映画ポスター  
(下段) シングルレコードジャケット【近藤・田原・野村 (THE GOODBYE として)】

### 3.2. 「たのきん」が残した功績

彼等が残した功績はめざましいものがあった。テレビでは、TBS 系の「たのきん全力投球」への 3 人の出演が挙げられる<sup>9)</sup>。

また同テレビ系列の代表的な長寿歌番組「ザ・ベストテン」(1977 年～1989 年。木曜日の 21:00～21:54)では、田原、近藤が最新ヒット曲をひっさげて、上位にランクインし、ファンらを熱狂・魅了していくことになった<sup>10)</sup>。また日本テレビ系列の「カックラキン大放送」(金曜日の 19:30～19:54)では、堺正章、研ナオコ、西城秀樹、野口五郎、郷ひろみ、ラビット関根(現在の関根勤)ら大物歌手やタレントにまじってコントや歌を披露した。テレビ東京系列の「ヤンヤン歌うスタジオ」(通称はヤンスタ。土曜日の 16:00～16:55)においても、他のアイドルらの先頭に立ちながら、毎回のコントや運動、歌などを展開した。まさにテレビで「たのきん」を見ない日はないほどであったといえる。

また映画では東宝(映画)が「たのきんスーパーヒットシリーズ」と銘打ち、『青春グラフィティ スニーカーぶるうす』(1980 年、シリーズ第一弾、近藤主演映画)、『ブルージーンズメモリー』(1981 年、シリーズ第二弾、近藤主演映画)、『グッドラック LOVE』(1981 年、シリーズ第三弾、田原主演映画)、『ハイティーン・ブギ』(1982 年、シリーズ第四弾、近藤主演映画)、『ウィーン物語 ジェミニ Y と S』(1983 年、シリーズ第五弾、田原主演映画)、『嵐を呼ぶ男』(1983 年、シリーズ第六弾、近藤主演映画)の全 6 作が製作された。

また野外コンサートについても、たのきん解散時である 1983 年までに数 100 回を超えている。3 人のシングルレコード、カセットテープ、ミュージックビデオ、プロマイドなどの売れ行きも好調であったようである。

### 3.3. 平凡の表紙における「たのきん」の登場回数

デビューを果たした 3 人の平凡表紙の登場回数は彼等の人気に比例して非常に多いことがわかる。1981(昭和 56)年の表紙では、2 月号:37 巻 3 号(3 人)、3 月号:37 巻 4 号(近藤)、5 月号:37 巻 6 号(田原)、6 月号:37 巻 7 号(近藤)、7 月号:37 巻 8 号(田原、野村)、9 月号:37 巻 10 号(近藤)、10 月号:37 巻 11 号(田原)、12 月号:37 巻 13 号(近藤)とほとんどの誌面を飾る。3 人が表紙を飾ったのは同年 2 月号の僅か 1 回であった。残りは田原、近藤が占めている。また田原と近藤の脇を飾ったのは当時の女性アイドルといわれていた 1981 年では松田聖子、河合奈保子、柏原よしえらであった。

1982(昭和 57)年では 2 月号:38 巻 2 号(田原、近藤)、3 月号:38 巻 3 号(田原)、4 月号:38 巻 4 号(近藤)、5 月号:38 巻 5 号(田原)、6 月号:38 巻 6 号(近藤)、8 月号:38 巻 8 号(近藤)、9 月号:38 巻 9 号(田原)、10 月号:38 巻 10 号(近藤)、12 月号:38 巻 12 号(田原)と続くものの、野村一人は影を潜める。1983(昭和 58)年には、

39巻1号(近藤)、39巻2号(田原、近藤)、39巻4号(田原)、39巻5号(近藤)、39巻7号(田原)、39巻8号(野村)、39巻9号(近藤)、39巻10号(田原)、39巻12号(近藤)となっている。同年結成した4人組バンド「The good-bye」の効果か。野村が久々の登場が見られた。依然として田原と近藤の快進撃は続くのである。また近藤と表紙を飾ったのは中森明菜であった。その後のたびたび表紙をともにし、のちに恋路の契機となる。

翌1984(昭和59)年も「たのきん」に人気は飛ぶ鳥を落とす勢いであった。40巻1号(野村)、40巻2号(田原、近藤)、40巻3号(田原)、40巻5号(近藤)、40巻6号(田原)、40巻9号(近藤)、40巻12号(田原)が表紙を飾った。しかし「たのきん」の誌面に飾る回数が減少したこと、さらに事務所の後輩アイドルであったシブがき隊、少年隊、3年B組金八先生で人気を誇った沖田浩之、ひかる一平、さらに異色のものでは、福岡久留米が生んだ人気音楽グループのチェッカーズ、さらに先述のシブがき隊を筆頭に小泉今日子、堀ちえみ、中森明菜、石川秀美、松本伊代ら「花の57年組」の面々が誌面を賑やかにするようになったことが起因している。

1985(昭和60)年になると、その景色が少しずつ一変していく。41巻1号(近藤)41巻2号(田原、近藤)、41巻5号(田原)、41巻7号(近藤)、41巻8号(田原)、41巻12号(近藤)であった。既に表紙の常連になりつつあったシブがき隊、少年隊、松田聖子、中森明菜、小泉今日子らに加え新たに斉藤由貴、菊池桃子、岡田有希子ら新人アイドルらが誌面に登場するようになった。なお野村は一度も登場していない。

1986(昭和61)年では、42巻2号(田原、近藤)、42巻7号(近藤)、42巻10号(田原)の3回の登場に止まった。先述した事務所の後輩アイドルのなかに新たに、「男闘呼組」が加わり、CCB(coconuts boy)、荻野目洋子、本田美奈子、そしてとんねるずが登場するようになる。たのきんの人気に翳りが見えるようになっていた。

同誌廃刊の1987(昭和62)年には、光GENJIが新たに登場し、事務所後輩アイドルが表紙を席卷した。彼等の脇には女性新アイドルであった中山美穂、南野陽子、浅香唯らが飾るようになった。「たのきん」の登場は、43巻4号(近藤)の1回きりとなっていた。田原、野村は掲載されていない。最終号の12月号はタレントは起用していない。

かくして「たのきん」は、『平凡』誌における最後に登場した人気アイドルであったといえよう。

また田原、近藤の「巻頭グラビア」を飾ったタイトルを以下に挙げてみたい。いかに人気を席卷していたことがうかがえる<sup>11)</sup>。

【田原俊彦】

- ・「横須賀　そして僕の映画ものがたり」(39巻1号)

- ・「初顔合わせ 徹底比較!! 田原俊彦、松田聖子」(39巻2号)
- ・「東京ディズニーランド探検 念願のミッキーマウスにご対面!!」(39巻4号)
- ・「初顔合わせ 夕暮れデート 瞳の中でボクがテレてた 田原俊彦、ソフィーマルソー」(39巻5号)
- ・「田原俊彦=触れて、見て、大和路一人旅 心もオトナになれそうです!」(39巻6号)
- ・「男の休日行動学 なんかこの頃胸がうずくネ!」(39巻7号)
- ・「三球コンサートに賭ける気分は高気圧・夏はマリン・シャワー」(39巻8号)
- ・「心も体も青年の夏ああ太陽がいっぱい」(39巻9号)
- ・「看護婦日記」(田原俊彦 & 竹下景子)(同上)
- ・「ひと足先に秋の色箱根一泊小旅行 さらば夏」(39巻10号)
- ・「初経験 それはおとこの旅立ちだ! 愛NG」(39巻12号)
- ・「仲間もまるごと燃えるトシの追跡とびきりツアー いこいの瞬間」(39巻11号)

【近藤真彦】

- ・「悪ブリ悪ノリ悪ガキの1週間を徹底追跡!!」(39巻1号)
- ・「初日の出、初ドライブ、初風呂、初づくし」(39巻2号)
- ・「故郷思い出歩き なつかしさプレーバック」(39巻3号)
- ・「愛車シトロエンを独占公開」(39巻4号)
- ・「湘南ロッキン・バイシクル 思い出ガブっと!」(39巻5号)
- ・「近藤真彦=マッチ・ハリケーン映画 & 学園生活に大暴れ! 嵐なんかめじゃない」(39巻6号)
- ・「今年の夏もオレがいただき」(39巻7号)
- ・「ハワイロケも大成功で大満足! 足の裏も真っ黒コゲヨ!」(39巻9号)
- ・「マッチは今秋でっかくイメチェンする 熱中したらとまんない」(39巻10号)
- ・「マッチのツッパリの原点は体力だ タフにしているよ!」(39巻12号)

【田原・近藤共通】

- ・「ビック5 83年の抱負を語る 俊彦、真彦、聖子、奈保子、よしえ」(39巻2号)

たのきんは表紙のみならず巻頭グラビアを飾り、平凡における一時代を築いたアイドルとなっていた。



#### 4 読者投稿欄「ヤングスクエア (young square)」の設定

##### 4.1. 投書欄「いいたいほうだい」と編集部「オヤサン」の存在

「いいたいほうだい」(ヤングスクエア)は、平凡誌における「読者ページ」である。編集部には「オヤサン」という架空の人物が設定されている。オヤサンは冒頭で次のように述べている<sup>11)</sup>。

みなさんのための『ヤングスクエア』だ。大事に末長くかわいがってください。よろしくお祈いしますよ。今月はどんなハガキが採用されるかっていうと、教えてあげましょう。字は汚くてもしょうがないけど、ていねいに書く。

うそは絶対に書かない。良心の問題だね。でも冗談コーナーは別だよ。ペンで書くこと。鉛筆書きは、うすくなって見えなくなるんだよ。それに採用されなくてもコリズに何度もチャレンジすることだ。オヤサンはハガキを全部見てますよ。封書は何度もいうけどダメ。中にお金や切手を入れてくる人いるが、これはルール違反だ。匿名は認めるけど、本名と住所は必ず明記するのだよ。それではみなさん2千円めざしてがんばってください

「オヤサン」は読者投稿者に誌面にてルールを説明している。なお若者読者に現金を送金するということもあり、取り扱いは慎重であったようである。「宛先は〒104 東京都中央区築地1の7の10 平凡出版(株) 平凡編集部『ヤングスクエア 各コーナー』だ。というせりふが毎回のようには繰り返されるのである

ところで「オヤサン」は誰なのか。ここでは特定はしていない。おそらくは編集部の総体をさすものであろう。「オヤサン」は、アイドルについての情報提供やコメントも行うが、若い世代の投稿者等に対して日常生活へ注意喚起を促したり、ときには彼等読者の不安や悩みにやさしく接しながら回答してくれる「兄貴的存在」であったようにうかがえる。投稿者から「オヤサン」へさらに情報はオヤサンから投稿者へと伝達されるシステムを形作ることになった。

毎回見開き2頁で、掲載された。「たのきん」についての投書はどのようなものになっていたのか。以下に見てみたい<sup>12)</sup>。(下線は執筆者)

トシちゃんにあいたいから東京に

私生まれて16年間、このど・ど・ど田舎で暮らしてきたけど、今日ほど田舎がいやになったことはないのです。

よく都会の人は「田舎はいい、空気はおいしいし自然がたくさんあって」なんていうけど・・・私は空気が悪くても都会のほうがいい。実は私タノキン族の田原 kun の大大ファン、でも私の住んでいるところは田舎だから、ポスターの一枚も売っていないのです。うっく、あーんあーん“あんみつ”。それに都会の人はスターに町で会えるし、まったく文句なし。本当にうらやましいよ。

この間ヤンヤンみていたら、田原 kun のファンが「LOVE、I、LOVE トシちゃん」なんて応援しているのに、私はブラウン管のむこうからしか応援できないので。私だて間近で応援したいのです。田原 kun を好きな気持ちは都会の人にとかわりません。なのに、どうしてこんなに差があるのか、わかる？(田原 kun のサインがほしい田舎の子)

それでも女か

かなり古い話だけど、去年の9月21日は輝かしきトシちゃんの「ハッとしてGOOD！」の発売日だった。トシちゃんが来ると聞いて、あるデパートへ。まあ、ほんとうにたくさんの女、女、女。そこまではまだ平気だったけど、だれかが「トシちゃんが来た！」なんてデマをいったの。みんなそこめがけて走っていったの。すると「まあ恐ろしい、私の友達に足ひかけて平気で走って行く人もいるし。友達ひざすりむいて血が出たよ。私なんか。後ろからブラのホックはずされたんだから。これが女のすることか。頭にくる。結局トシちゃんには会えないし・・・。ギャーギャーさわぐだけがファンじゃない。たまにはハンカチ持って柱のかげから、見守ってあげたら。少しはマナーも考えようよ。(東京・トシ子というトシちゃんの妻)

トシちゃん、正直に言ってくれてありがとう

トシちゃんが20歳と聞いたとき、ハッキリ言ってすごくショックでした。ショックで涙が出てきました。それはトシちゃんにうそをつかれていたというショックではありません。私は12歳でトシちゃんは18歳。それでも6才もはなれてしまいます。12歳と20歳ではなお離れてしまいます。年がはなれると、トシちゃんと私が間みたいなのがすごくはなれてしまったみたいで、また、はなれてしまったというような、さみしい気持ちになったので泣いてしまったのです。でもトシちゃんが正直に言ってくれたので、とてもうれしかったです。正直に言ってくれたのは、トシちゃんに“ファンを思う気持ち”がいっぱいあったからだと思います。トシちゃん。これからも正直で、ファンを思う気持ちを忘れないでください。トシちゃん。正直に言ってくれてほんとうにありがとう(北海道・トシちゃんとロニーの妹より)

涙で答えてくれたマッチ

とってもキレイな涙を見ました。本当に心から「ありがとう」って言っていました。「ザ・ベストテン」での「スニーカーぶるうす」を歌ったときのマッチの涙です。マッチの涙、初めて見ました。いたずらばかりしているマッチなのに・・・

いろいろな人に、いろいろな事に、そしてデビュー曲「スニーカーぶるうす」に、ありがとうっていうかわりに、涙で歌で答えてくれたマッチ。思わずつられて泣いた私に、妹が変な顔で私を見てた。でも私、歌っているマッチは今何をいいたのかすごくわかる気がしたんです。「これまでこれたのもみんなのおかだから」そう言っていましたよね。マッチチファンのみなさん。私だけじゃないと思う。こういうふうにしたのは、マッチの違った一面、発見しました。これからも私達ファンのために、マッチは一生懸命がんばってくれると思います。いいえ、自分自身のためにももっともっとがんばってください。あんなキレイな涙を流したマッチに、私から「ありがとう」って言いたい気分です。19年後にマッチの「スニーカーぶるうす」きっとすてきでしょうね。いつまでも遠くから応援しています（福岡・トシちゃん）

マッチ、こんなファンがいることも知って

マッチは今、“アイドルだとしたら恋はできないのか”ということに悩んでいるみたいだけれど、私が思うには、マッチの考え方がおかしいと思います。

いくら人気があるアイドルだって、恋はしていいと思います。ハッキリいうと、その記事を読んだときくやしかったのです。私たちがいるからマッチは恋はできないのか。マッチがこんな考え方をしているかと思うと、とってもくやしかったのです。私、おこってるんじゃないかと本当にこう思うのです。ファンのみんなにイヤな思いをさせたくない。気をつかってくれるのはとてもうれしい。でも私たちのことばかり考えていたら最後に疲れちゃうんじゃないかな？マッチはとてもし生懸命やってくれています。私達のために・・・でも、マッチ自身は自由だと思うのです。

マッチに好きな人ができたら、私達だってどう反応するのかわかんないけど、たくさん恋をしてほしい！・・・その方がかがやいてみえると思うのです。

私達を信じて下さい。ずーっとマッチのファンです！今のマッチは恋をしなくても、とてもステキです。「恋の相手がいないのなら、このままで」本音をみんなそう思っているのではないのでしょうか？でも遠慮はいりません。だって、私達はファンであり、友だちだもん！！でも。いつものマッチからこんな悩みは想像できないなあ・・・（名古屋・マッチの笑顔）

田原のファンも近藤のファンも、熱狂的なファンが存在していることがわかる。ファン

はこのような投書を通して、ファン組織を形成していったのである。

#### 4.2. 読者のページ「ヤングスクエア」の変化

1981年10月号より、アイドルの似顔絵などが掲載されるようになる。

編集部の「オヤサン」はこのことについて「みんな元気でやってるかい！このこところハガキの量は増えているけど、質が低下ぎみだね。いいたいほうだいはタレントに関する意見だけじゃなく、身のまわりにおこったことなんかも送ってくれよなLP評。映画評も少ないね。おもしろい意見をたのむよ。どんなハナシでもいいけど、盗作は絶対にいけないよ」と冒頭で述べている<sup>13)</sup>。「盗作の横行」が現状であったことへの警鐘を促しているとともに、ハガキの質の向上を求めている。

「いいたいほうだい」の投書内容も1982年ごろより、投稿者らの学内事情や私生活の様子にふれることが多くなった。また「ペンフレンド募集」、「彼氏彼女募集」、「キャンパスレポート」など他の誌面にもぎわすようになっていた。

また1983年頃からは、「ヤングスクエア」が消滅し、それに変わり「おもしろLAND」(読者ページ)が登場した。「年下を好きになったらダメなの?」とか「校内暴力、それは先生次第さ」(39巻7号)、「夏のsexはchange&peace」(39巻8号)、「まねまねポスト」(39巻9号)、「平凡ベストテン」(39巻9号)などが新たに登場した。ヤングの読者が多かった同誌では、学校の先生の話、思春期の頃の悩みなどをぶちまけるコーナーとして変化していたものと思われる。また「バラエティBOX」のコーナーでは「親友の安売りはやめてよ」とか「金八先生はうちの学校にもいるよ」、「処女で悪いかよ」(39巻11号)、「メグはオレのもんだからな」、「ライバル変態委員長には負けるぜ」(39巻12号)に示したように、若い時代のころの恋愛や性的な事情に対しての記事になっている。また「たのきん3人組 フォーエバー」という記事では、つぎのように書かれている<sup>14)</sup>。

私はたのきんの大ファンです。トシちゃんもヨッチちゃんもマッチもみんな好きです。その3人が解散してしまいましたね。私としてはあんなに仲のいい3人が解散なんて……。すごくさびしい気がします。それにしてもトシちゃん、ヨッチちゃん、マッチが成長していくたびにだんだん遠い存在になってしまうのがさびしいです。これからも3人を応援していきます。だってトシちゃんはやさしいし、ヨッチちゃんは、親しみやすいし、マッチは男らしいし、3人ともそれぞれいい面をもっています。これからもファイトでがんばれ！！(東大和市 たのきん LOVE)

「たのきん解散」の報を聞くも、いつまでも変わらずファンでい続けようとする「たのきん LOVE」の思いが伝わってくる。たのきん人気は平凡読者のなかにも大きく残った

のこったのである。

しかしながら「たのきん」を代表するアイドルをとりあげるような内容ではなく、若い読者等の生活にちなんだ話題や、こぼれ話などのユーモアをとり入れたものであった。

しかしながら「たのきん」の人気には変わらず定評があった。1年に3回ほど行われた誌面内の「おしゃれタレント」の人気調査では田原や近藤は常に上位にランクインしているなど、その人気振りは変わらない。

「おもしろ LAND」は以後も変化を続けた。40巻1号（1984年1月号）では「読者と編集長のホットライン」といわれる読者と編集長をつなぐ投稿コーナーが新登場する。しかしながら投稿者の日記等の報告などを紹介しているのみで交流はほとんど見られない。「物々交換」、「ペンパル募集」、「アンケート調査」、「おもしろベストテン」のコーナーのみである。ユーモア路線を進んでいる。40巻7号（1984年7月号）では「彼のエッチな体験記」のようなものも登場している。ヤング読者のための雑誌に変化している。

1984年末には、「おもしろ LAND」は誌面から消滅した。

#### 4.3. 誌面でファン同士の対立も

誌面上でファンが対立することもしばしばであった。「たのきん」の田原と松田聖子のツーショットを表紙に掲載した件である。事の発端は81年10月号の表紙であった。それについて広島の子田中次子はつぎのような投書を寄せている<sup>15)</sup>。(下線は執筆者)

トシちゃん・聖子はカップルで

ワタクシ、平凡編集部の人達に感謝いたします。それは10月号に初めて、トシちゃんと聖子ちゃん、2人だけで表紙にのったことであります。こんなこと、どんな雑誌にもありません。本当にありがとうございます。平凡以外の雑誌は、トシちゃんと聖子ちゃんを一緒にのせたら、ファンの子からカミソリが送られるのではないかと怖がっているのではないのでしょうか？それに比べて、平凡はすばらしい。私、好きです。私、トシちゃんと聖子ちゃん、すばらしいカップルだと思うのです。だから2人が一緒にテレビや雑誌に出てたら、すごくうれしいのです。このごろ、テレビや雑誌など、あの2人のことさけている。私はとてもいや。

10月号の附録 TOSHI&SEIKO のステッカーもすこくよかった・今後もまたトシと聖子のせてね。対談なんかもいいナア。それもカラーページでね。(広島・田原次子)

田原の投書に対し、ツーショットの表紙に怒りが頂点に達しているファンも少なくなかった。「宮城・トシちゃんの妻」からの投書である。タイトルからして、文面について恐ろしく過激になっていることが想像がつく<sup>16)</sup>。

一体何なのあの表紙

10月号の表紙、頭にきました。どうしてトシちゃんと聖子ちゃん、くっつけるんですか？私、絶対に許しません。トシちゃんと聖子ちゃんがまわりで故意にくっつけようとしているみたい。もうあの表紙見たら、平凡キライになってしまいそう。大好きなトシちゃんの手が、聖子ちゃんにふれたのかと思うと、とりはだがたってきそう……。聖子ちゃんにトシちゃんをとられるくらいなら、トシちゃんを殺して私も死にたい……。  
(宮城・トシちゃんの妻)

このことを編集部はおもしろくしている。それは編集部のコメントに見える。「賛否両論まっぴたつにわかれしました。賛成6分、反対4分の割合。この手紙は賛成の声」と田原の投書を紹介し、また宮城・トシちゃんの妻へのコメントでは「トシと聖子はまさにトップアイドル。よく悪くも反響が多いということはうれしいこと。今後も、平凡はセンセーショナル・マガジンだぜ」と逆に読者等を煽っている<sup>17)</sup>。しかしながら田島の研究では、平凡の「オヤサン」と同じように『明星』においても「明星アニキ」の存在を指摘している。「明星アニキ」は、やはり編集者の総体のことであり、1973年の10月号より、読者ページ（「ハロージョッキー」）に登場するようになったのだが、中でも「ハローキャンパス」内では「ヤング・ヤング・ボイス」が「明星アニキ責任編集」となっており、以上の分析からわかるように、「ヤング」から寄せられた意見に対して、共感したり、時には、論したりしながら話の聞き役として、または、議論の場の進行役として機能していた。また、「キミは、どう思う？」という形で読者＝「ヤング」に、問題に対する自分なりの見解を求める役回りでもあった。今までの例の中では、あくまで読者から寄せられた投書の中の意見に対して、「明星アニキ」が問題提起を行っていくという形であったが、この他に、「明星アニキ」本人が問題提起の発起人となる場合もあり、例えば、「明星アニキからの問題提起 ペンパルについてキミはどう思うか」と題して「明星アニキ」自身が読者に問題を投げかけ、読者のためのページの運営方針にかかる議題を提示したり、読者＝「ヤング」に考えてもらう契機となったりしていた。以上のように、「明星アニキ」は、読者が読者ページ内で展開した「私たち（ヤング）VS 大人社会（先生/親）」という関係の仲介役となり、「ヤング」の意見を相対化しながら「ヤング」と大人とを繋ぐ存在として機能していたことについて述べている。『平凡』についても『明星』についても、編集部を中心に据え、双方向的なコミュニケーションがとれるようなシステムをとっていたことがわかる<sup>18)</sup>。

このような「仕掛け」により、ますます平凡編集部は、ファンらも盛り上げていこうとしたのである。そのひとつが「ファンからの投書合戦」であったのであろう。

## 5 「たのきん」中心の誌面構成

### 5.1. 身近な存在としての「たのきん」－学校でデートから誌面でデートへ－

同誌第38巻10号(1982年10月号)では、「おもたせ、3カ月企画 たのきんと電話デート」の広告が誌面に掲載された。「もうみんな見てくれたね。僕たち3人がそれぞれ全力を出しあった、「ハイティーンブギ」。どんな感想を持ってくれたなこの夏のコンサートでも十分ファンの子とおしゃべりしたけど、やはりジックリそんな感想でも電話でも聞いてみたいね」たのきん3人も楽しみにしているぞ！そして、みなみなさん、そうお待たせしました。新学期へのビックな企画。編集長も、編集部はハガキの山になってもイイといっているから、ドドーンとハガキをたのんます。たのきん3人とキミの電話でデート。まず第一回目は「ハイティーンブギ」の主演、近藤真彦。そして11月号募集で田原俊彦、12月募集で野村義男と続きます。新しくお正月へ出発するトシちゃん、バンド結成がかたまりそうなヨッチャンもチョット先の話だけど、乞う御期待で待ってまーす」との宣伝である<sup>19)</sup>。また告知文章の下には「応募券」もついている、いつでも応募できるようになっていた。では、「スターと電話デート 近藤真彦」(連載・31回)を少しくのぞいてみたい<sup>20)</sup>。

明日出るテレビでピースをやって！！

滋賀県蒲生郡 勝見真智子(15歳)

真智子：新曲頑張ってください。

真彦：ウン、もちろんさ。

真智子：それにね。LPの中のマッチが書いた詩。すごくよかった！

真彦：あ、本当に！？どうもありがとう。

真智子：ぜひ、お願いがあるんです。滋賀県にコンサートに来て下さい。

真彦：ウン、わかった。でも僕が決めるんじゃないけど、担当の人にいとくね。

真智子：お願いします。それに明日「夜のヒットスタジオ」に出るでしょ！？できたらテレビにむかってピースマークをやってほしいんです。

真彦：エ！？そうか。出来たらやるよ。でも、緊張しちゃって、むずかしいんだよ。本当に。

マッチの手って大きくてあったかい！

岐阜県不破郡 小田ゆかり(17歳)

ゆかり：名古屋のコンサートで握手ができて、とてもうれしかったの。

真彦：そっか。どうもありがとう。

ゆかり：一生忘れないと思う。握手したこと。

真彦：オレもわすれないよ。

映画の中で一番気に入っているセリフは

香川県綾歌郡 宮田優子 (12歳)

優子：ファンの反対で、「ハイ・ブギ」をやめようと思わなかった？

真彦：一回はちょっと思ったけど、一度決めたことだからね。やろうと思ったよ。

優子：映画の中で一番気に入っているセリフは何？

真彦：そうだなあ！「ウン、条件のんだけ！」

優子：「これを機会につきあってくれ」もいいね。

真彦：ああ、花束持って教室に行ったときだね

優子：最後に、キスシーンの時、どうしてた？

真彦：緊張して、何が何だかわからなかったね。

どの少女ファンも近藤と電話でのデートに酔いしれている。普段の生活からはとても考えられない「出来事」であったのだろう。しかしながら平凡なファンと憧憬するアイドルをできるだけ近づけながら、もっとファンにさせるような装置を用意していた。ファンから見たら「夢のようなデート」であった。近藤をはじめアイドルは、ますますファンを獲得していくことになった。また近藤は同号において「ださい大人にゃなりたくない 近藤真彦・18才の夢」のなかで、つぎのように述べている<sup>21)</sup>。

俺もガキだから、人のこと言えネエけどさ、自分に自信のある奴が少ないぜ、まったく。こびない、曲げない。ツツパリとおす。俺だったら、そんな大人になってみせるぜ！！

18歳になったばかりだけど、あと2年もすりゃ20歳になるだろう。当たり前と言えば当たり前だけど、自分でも20歳すぎたら、もう大人の仲間入りだ！！と考えている。そんなおおげさなもんじゃないよ。ただ自分に素直に生きたいだ！嫌なことは嫌、好きなことは好きって、ストレートにいえるようにね。

最近の大人ってどこか不健康だよな。きっとタバコや酒のせいもあるんだろう。俺はやらないね。やるんだったらスカッとしたのをやるさ。車のレースにハンティング。なんか自分を賭けられるもんがいいね。



俺は激しく燃えて一瞬で勝負する気性だから死ぬまでツッパリ続けるだろうな、そうじゃなきゃ意味ないよ。

近藤の大人観がうかがえる。「18歳になったばかりだけど、あと2年もすりゃ20歳になるだろう。当たり前と言えは当たり前だけど、自分でも20歳すぎたら、もう大人の仲間入りだ！！と考えている。そんなおおげさなもんじゃないよ。ただ自分に素直に生きたいだ！嫌なことは嫌、好きなことは好きって、ストレートにいえるようにね。最近の大人ってどこか不健康だよ。きっとタバコや酒のせいもあるんだろう。俺はやんないね。やるんだったらスカッとしたのをやるさ。車のレースにハンティング。なんか自分を賭けられるもんがいいね」というのが、近藤が18歳の等身大の姿で、思う存分生きてやろう！というようなアイドルから脱した人間の言葉のように取れる。「俺は激しく燃えて一瞬で勝負する気性だから死ぬまでツッパリ続けるだろうな、そうじゃなきゃ意味ないよ」という言葉に多くのマッチファンは恋い焦がれたのである。

たのきんは、誌面のみならずラジオにも登場した<sup>22)</sup>。ライバルの田原はどうであったのか。同誌第39巻3号(1983年3月号)の田原の記事「ぼくは野生児」では、田原は次のように語っている<sup>23)</sup>。

ねらうぜ！アイドルナンバー1！マッチやヨッチャン、同じ事務所に良きライバルがいるけれど、やはり今年もマイペース。そう、それは22歳になる男・田原俊彦の83年新春の誓い。

田原は近藤より2才年上になる。田原が1979年「哀愁でいと」でデビューでその1年後に近藤がデビューを果たす。「たのきん」では最年長者となる、田原の心からの意気込みであろう。1983年1月号(39巻1号)に掲載の平凡連載の「スター電話でデート」では、つぎのようにファンの女性と話している<sup>24)</sup>。

「どんなとき幸せだと思う？」 広島県広島市 林由美子(15歳)

由美子：トシちゃん、どんなとき、幸せ？

俊彦：そうだな。やはりステージに立っているときかな。

由美子：今は？

俊彦：今は由美子ちゃんとしゃべっているとき。なんちゃって。

由美子：私はもう最高。ドキドキしています。あのう、トシちゃん、コンサートのとき、一人一人の顔って見えるのですか？

俊彦：うん、見えるよ。デビューの時は全然わかんなかったけど、その時はみんな

ニンジンとか野菜とか、ピーマンとかには見えてたけど……。ゴメンね。でも今はちゃんと見えているから、由美子の顔も特徴を言ってくればちゃんと探すよ。広島に行ったとき。

由美子：ハイ！ありがとうございます。うれしい！

「マッチに負けているものは？」香川県善通寺市 富田和子（17歳）

和子：明日から修学旅行なんです。

俊彦：えっ。いいなあ。どこいくの？

和子：信州と東京

俊彦：じゃあ、会えるかもね。

和子：わー、あいたい。

俊彦：ハガキに質問書いてあるね。一番欲しいものは何ですか？ミッキーのパンツ、赤ちゃん、お嫁さん、それはもちろん、ミッキーのパンツだよ。

和子：あげたよ。

俊彦：へえ、それはサンキュー。それにマッチに負けているものは何？

①が顔で②が若さ③が足の長さ ずいぶんひどい質問するね。

和子：ゴメンなさい。

俊彦：全部、負けてるな。エヘヘ。

これでも謙遜しているんだよ。

和子：トシちゃん、勝ってるよ。

トシちゃんのジョークが織り交ぜられた会話に、ファンも楽しんでいる様子である。ライバルのマッチの質問にも年上らしい、大人の回答しているところが目を引く。

また「たのきん」のもうひとり、野村も同年同月号の「スキーにアタック」になかで次のように述べている<sup>25)</sup>。

そんなにいそがなくとも、すばらしいバンドをつくるよ。一度しかないデビューだからね。真剣に、そして慎重にやらなくっちゃね。もう少し待ってね。

中途半端はいやなんだよな。……もう少しがんばってみてこれが最高だと自分で納得した時に、トシちゃんやマッチに負けないように、スパーンとデビューしたいな。歌手としてのデビューばかり騒がれちゃってるけど、じっくり考えて役者としてもやっていけるようなオールマイティーのタレントになりたいです

トシちゃんやマッチとは異なり、バンドマンとしてのデビューについての抱負を語る野村の言葉に“個性”を見いだすができる。ライバルの2人はすでにデビューも果たし、人気アイドルの仲間入りをしている状況であるにもかかわらず、野村はそこに割り込むこともなく、自分の順番を待つのである。「トシちゃんやマッチに負けないように」と言葉のなかでは述べているが、それは売れる売れないでの勝負ではなく、個性を認めてもらえるアイドルとしての意味であったようにも感じ得ることができよう。その後数ヶ月で野村は「the goodbye」を結成し、ライバル2人に遅れはとるものの、田原、近藤も同じく受賞した、「日本レコード大賞新人賞」を獲得する。近藤はその5年後の1987（昭和62）年に「愚か者」で日本レコード大賞を受賞しているのは記憶に残っていることであろう。彼のレコード大賞受賞はジャニーズ事務所初の快挙となった。

まさしく1983（昭和58）年という年は、「たのきん」にとってそれぞれの三人それぞれ新たなチャレンジをしているターニングポイントになった年であったことを意味づけるのである。田原はダンスを中心に役者としての活動を、ダンスに腕を磨き、近藤は歌手とカーレーサーへ、野村はバックバンドと役者の道に関心を示していく基点ともなった。

## 5.2. 「たのきん」人気の凋落—歌番組の終焉と後輩アイドルの登場—

1983年の「たのきん」の解散を機会に、3人は歌手を基本におきながらも、それぞれの道を歩もうとしていた。田原は役者として、近藤はカーレーサーとして、野村はバンドマンとして周辺から「たのきん」と叫ばれながらも、独自路線を貫いていく。また平凡の表紙掲載も少しずつ減少した。彼等がよく出演していたテレビの歌番組が相次いで終了していくことになった。TBS系列の「ザ・ベストテン」が1989（平成元）年9月末に終了したのをはじめ、日本テレビ系列の「ザ・トップテン」（のちの「歌のトップテン」）が1990（平成2）年3月にあいついで終了した。たのきんは3人ともに歌番組中心の活動をこれまで展開してきたのであり、歌番組の出演は基本的には欠かさなかったため、本拠地・基盤を失うことになった<sup>26</sup>。また少年隊、男闘呼組、忍者等といった、たのきんらの後輩らの相次ぐデビューも大きく関わった。田原は、1993年の自らの結婚を機会に、翌年事務所を離れた。野村も「The goodbye」解散後の1992年に事務所を辞めている。近藤のみ現在も事務所に所属している。このことが「たのきん」時代の終焉を意味するものであった。

## 6 おわりにー『平凡』廃刊とジャニーズアイドルの量産ー

### 6.1. 読者投書欄「Super me ☆ her」の新設と“スクールライフ”を中心とした読者同士の交流

同誌第40巻12号(1984年12月号)より、誌面には読者の投書欄「Super me ☆ her」が設けられた。「おもしろLAND」以来、まとまった投書コーナーの存在はなかったため、しばらくぶりの投書欄であった。内容は、編集部の「おかめぶたキョンコ」なる総体が、読者の相手となり、若い世代の読者を対象としたコーナーであった。しかしながら「おかめぶたキョンコ」は、基本的には読者と交流するものでなく、読者同士をとりもつこともしない役割となっている。誌面で唯一、登場しているのは「夢見るブスっ娘クラブ」といわれる投書欄であった。この投書欄は欄自体が、ひとつの学園における学級(クラス)のような構成となっている。そこでキョンコはブスっ娘クラブ委員長を務めている設定である。彼女が扮するブスっ娘クラブ委員長の「ごあいさつ」は以下のようになっていた<sup>27)</sup>。

免許取り立て 若葉のキョンコ ごあいさつ

天高く馬肥えて、わがブスっ娘クラブ会員みなさんも肥えたかな……。たった2カ所ではありますが、会員の皆さんに会いにワタクシ、おかめぶたキョンコが札幌と広島にまいります。お友達をさそって来てねン

いかにもキョン子が「ブスキャラ」を演じていることがうかがえよう。さらに「ブスっ娘の道へのおさそい」といわれる会員になるための方法についても示されていた<sup>28)</sup>。

あなたもブスっ娘クラブに入れば永遠のしあわせが手に入ると自己満足にひたることができます。これでは入会の価値があるってもんです。会員に登録された人には右のメンバーズカードを送ります。

さらに「ブスっ娘になるための過酷な10箇条」についても書かれている<sup>29)</sup>。

- 1 けっして美人というしろものであてはならない
- 2 されど汚くはいけない。要するに清潔感だけは持っていること。
- 3 あくまで気さくないじめられっ娘。
- 4 まあ、健康的なかわゆさがセールスポイント。
- 5 うるさいぐらいにおしゃべり好き。
- 6 みんなからブスと平気で呼ばれて親しまれ平気で笑顔の返答ができること。

- 7 バレンタインにクリスマス。いつもプレゼントの送り手であること。
- 8 男の子、お友達いっぱいOK。
- 9 しかし恋人はだめ。
- 10 そんでもって絶対処女（自己申告可）

平凡誌上はじまって以来の読者投書ページである。アイドルに憧れる少女らで構成する読者欄ではなく、「ブスッ娘」といわれる「もてない処女」のイメージを持つ少女投書家らによって構成されたものである。アイドルを追慕する少女読者から、個々の性格を共有する少女読者仲間の共同体が形成されたことを意味した。

また「校則なんかぶっとばせ」というコーナーも人気があった。同誌最終号まで誌面に登場し、校則に関する生徒の思い・感情が吐露されたものとなっていた。その投書には次のようなものが紹介された<sup>30)</sup>。(下線は執筆者)

うちんどこなんかマフラー禁止だぞ！！

5月号の「相楽のペコちゃん」さん、まだあまい。私の学校ではマフラー着用禁止です。理由は「寒くないから・・・」寒いんです。福岡でも、手袋も学校の指示があるまで禁止。カラーゴム禁止、黒くつ禁止、学校特製補助バック、ストッキングは黒色のみ。これくらいでびびっちゃいけません。100円以上のシャープペンシル禁止なんていうめちゃくちゃなところもあるし、私の通ってた小学校はシャープペン使用禁止。生徒が寒い思いをしてがっこうにいつているのに、先生たちはフワフワのマフラー、手袋に真っ黒なストッキングをはき、車でブーン。当然かもしれないけどそんな姿で生活指導してひくなかよっ。(福岡県・尚ちゃんと郁弥くん)

違反している服は焼かれちゃう

ペコちゃんたちの中学校より私たちの中学のほうが厳しいんだから。マフラーなんかしたらダメ。手袋はペコちゃんと同じで白か黒。もっとひどいのが髪の毛。前髪はまゆ毛の上1センチ、おかつぱはくくる。後ろの上はエリにつかないようにする。男子は丸坊主、服装は違反があったら焼かれるのよ。その現場、私も見たけど残酷！私なんか入学した時から段カットにしています。しかもたった一人でがんばってるんだぞ！もっと反発してやろうかなあー。(岡山県・5000円がほしい女の子)

風紀検査で親が呼び出される、ひどい

ペコちゃんの学校はいいですよ。まだっ！私の神戸の学校なんてさいてー！マフラーなんてとんでもねえっ。段カットもだめ、前髪はまゆ毛が見えるくらいまで切る。くつ下

は三つ折り、週に1回の風紀検査では、髪の毛の長さ、たすきの名札、スカートの長さ etc・・・まで調べるんですよ。おまけに持ち物検査まであって、リップクリーム、エチケットブラシ、くし、プロマイド、キャラクター商品なんか見つかったら、すぐに親が呼び出されるのです。私の行っている学校なんてこんなに厳しいのです。だからペコちゃんもほかの皆さんも、校則にまげずにがんばろうね。(兵庫県・のりゆきの恋人)

いずれも投書家が通学する学校の校則の厳しさにおける不平不満をぶちまけている投書である。彼等3人の投書に共通しているのは、5月号のペコちゃんなる読者が寄せた投書への意見であろう。校則が厳しいことをそれぞれに紹介し、欲求不満への解消としながらお互い慰め合っている。「兵庫県・のりゆきの恋人」にいたっては、「校則」に対し徹底抗戦の構えを見せている。また当時のアイドル松田聖子らがしていた流行ヘアの「段カット」など若者用語が投書欄にたびたび登場する。おそらくは若者が共通して使用している言葉であろうか。いずれにせよ、投書家同士の交流がルールとなっており、「校則」についての不満をさらけ出す読者共同体の形成がうかがえる。それは以前までの「あにさん」が読者に返答するシステムとは異なったものであった。

また同誌第43巻第11号(1987年11月号)を見ると、誌面に「ジャニーズになるための条件 1通の履歴書から始まる！」と題する記事が掲載された。そこにはジャニー喜多川のインタビューのコメントが誌面一杯に載せられている。喜多川はすでに「トシちゃん、マッチは大人のアイドル」と称し、新たなニューフェイスを待ち望んでいるコメントが散見されている。すなわちジャニーズに入るための条件などが紹介されはじめ、かつてのたのきん人気を彷彿させるものとはなっていないのである。喜多川をはじめとするジャニーズは、たのきんに変わる新たな時代のアイドルを同誌が求め始めたことを意味する。

## 6.2. 『平凡』終刊へ

第二次世界大戦後すぐに発刊された同誌であったが、最終号のひとつ前になる1987(昭和62)年11月号では、「平凡が次号で休刊」となることを誌面において発表している。同誌の最後部には、「編集部からのお知らせ」が掲載されている。以下に全文を掲載しておきたい<sup>31)</sup>。(下線は執筆者)

長い間ご愛読ありがとうございます。

『平凡』は次号でよいよ最後です。思い出いっぱいつめこんで

320ページのぶ厚い特別号です！【予告】「オールカラーオールグラビア」

この一冊にトップアイドル24組と撮り下ろしフォトメッセージと、お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さんたちの思い出もギッシリ いつもキミたちの友達だった元気

いっぱい『平凡』からのステキな贈りもの

このメッセージの横には、御三家（橋幸夫、西郷輝彦、舟木一夫）、ザ・タイガース、フォーリーブス、新御三家（郷ひろみ、西城秀樹、野口五郎）、ピンクレディ、松田聖子、「たのきん」の写真が掲載されている。やはり「たのきん」は平凡を代表する顔となっていたことがうかがえる。いつも「読者の友達」であり続けた平凡が廃刊することで、読者らの心の拠り所がなくなることが告げられた。この件についての読者のコメントが書かれたところは見あたらない。

平凡の最終号（1987年12月号）には、平凡編集部から最後のメッセージが綴られている<sup>32)</sup>。

『平凡』は昭和20年の創刊以来、数知れない読者の皆さん、スターの皆さんと、”友だち” “づきあいをさせていただきました。その時代その時代をスターと読者の皆さん、発行にかかわっていたすべての方々との思いきり遊んできたような気がしています。けれども、私たちは、今、『平凡』という遊び場をちょっと変えてみようと思うのです。新しい”友達” “と”遊び” “を求めて……………。

最終号の準備のために大切に保管されていた大量のネガが編集部を持ち込まれチェックされましたが今もなお変わらない友達精神がそこに脈々と息づいていました。友達にししか見せないスターの素顔がそこにありました。掲載した写真の一枚一枚が友情の証です。楽しかった42年間の思い出を込めて、『平凡』と遊んだすべての方々にこの一冊を捧げます。新しい遊び場の新しい出逢いまで、ひとまず元気なさよならを……………。

今日まで長い間本当にありがとうございました

そこには、1986（昭和61）年にデビューをはたした「光 GENJI」について掲載された。彼等は誌面で次のように紹介された<sup>33)</sup>。

平凡最後のニューアイドル「光 GENJI」はいきなりトップアイドルになった  
爆発するエネルギー 飛び散る汗 しなやかな動きはもう だれにもとめられない  
新しい天体の誕生だ

「光 GENJI」を平凡最後のニュースターと紹介し、同誌最終号は閉じられている。かくして平凡誌は「たのきん」を最後のアイドルとして認め紹介し、多くの読者に彼等の情報などをあますことなく伝えることに成功した。しかしたのきん人気の凋落とともに、同誌は斜陽化していった。「たのきん」ファン等はこぞって読者投書欄に投書を寄せ、「その思

い」を伝えた。ときにはテレビ、ラジオ、コンサートなどで彼等とともに成長していった。たのきん人気は去ってからは、読者投書欄は読者同士の文通や交流、誌面でのやりとりが中心となった。いつしか読者等は目には見えない共同体を形成していった。それはやがてアイドルを標榜する読者の集いから、彼等読者が日常通学する学校へと目が向けられた。それは「校則」への批判、反発、「ブスッ娘」への認証と入会というかたちで、読者個人が投影されるものとなっていった。それは平凡誌の読者欄が彼等ヤング（若者）の居場所であり、そこで作られる主義主張などは、ある種独特のヤング共同体の性格を持つこととなった。

## 註

- 1) 田島悠来「1970年代の『明星』読者ページにおける読者共同体—『ハローキャンパス』の事例分析を中心に—」同志社大学『評論・社会科学』(103号、2012年)。田島は、これ以外にも「雑誌『MYOJO』における「ジャニーズ」イメージの受容」のなかで、明星のタイトルが英字表記「MYOJO」になった1990年代以降の読者意識の分析と男性アイドル像との関係について考察・検討をふまえている。
- 2) 阪本博志「1950年代前半における大衆娯楽雑誌の受容経験—『平凡』の共同体的受容と共振性—」『京都社会学年報』研究ノート、第9号、2001年。阪本は、創刊当初の1945年から1970年ごろにかけて、『平凡』誌の読者分析を行っている。著書には『平凡の次代—1950年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』(昭和堂、2008年)などがある。
- 3) 前掲、阪本書。
- 4) 前掲、田島論文。
- 5) たのきんのデビュー当時、田原俊彦は山梨県出身で1961(昭和36)年2月28日生まれの18歳、近藤真彦は神奈川県出身で1964(昭和39)年7月19日生まれの15歳、野村は神奈川県出身の1964年10月26日生まれの15歳であった。「たのきん」の名称の由来は、田原の「田(た)」、野村の「野(の)」、近藤の「近(きん)」のそれぞれの文字より抜粋したものである。
- 6) このドラマのなかで田原は「沢村正治」役を、近藤は「星野清」役を、野村は「梶浦裕二」役を演じた。番組内では「悪ガキトリオ」として人気を博すことになった。ドラマ視聴率は常に20%を超えたといわれている。たのきんのほかにも、三原順子(じゅん子)、鶴見辰吾、杉田かおる、つちやかおりらのちのタレントや女優を多く輩出した。
- 7) 本田博太郎、寺泉哲章を先生役としたWキャストのドラマであった。
- 8) 川崎は大阪府枚方市育ちで、1976年にデビューを果たす。テレビ番組や雑誌では他事務所所属の渋谷哲平と川崎とはNHK『レッツゴーヤング』でサンデーズの一員として共演していた。川崎と渋谷をセット売りするも多く、合同コンサートも幾度か開催していた。サンデーズ時代には田原や松田聖子とも共演を果たしている。1989年にジャニーズ事務所を退社してからは、役者の道をめざすことになった。
- 9) 1980(昭和55)年10月の開始を皮切りに同番組は主演のたのきん(田原、近藤、野村)で、彼らがコントや歌、クイズ、ミニドラマなどを番組内で展開した。さらにたのきんと同世代の女性アイドルらも毎回ゲスト出演した番組である。番組は、先端に針を取り付けた汽車が1周回る間にモノを組み立て、間に合わなければ汽車が大きな風船を割るゲームを実施したりと、それまでのドラマ形式の番組から一変した内容となった。当初は木曜日の19:00からの30分番組で、収録はスタジオで行われていた。しかし後に日曜日のお昼12時台へ移動した。しかしながら1982年に



は、放送枠を1時間に拡大し、ホール会場での公開番組へとリニューアルしたが、3人の過密なスケジュールなどの影響により、それから僅か1年後の1983年3月末にて番組は終了した。

- 10) 「ザ・ベストテン」において田原は、番組出演最多記録(200回越え)をつくったのははじめ、100週以上ベストテン入りした歌手においても、田原が1位(247週)、近藤は4位(211週)であった。10曲以上ベストテン入りした歌手についても田原が1位(35曲)、近藤は第2位(28曲)であったことは彼等が歌番組で人気を馳せておいたことを裏付けるものである。
- 11) 「いいたいほうだい」(「ヤングスクエア」『平凡』第37巻第11号、1981年10月号)。
- 12) 「トシちゃんにあいたいから東京に」同誌第37巻第1号(1981年1月号)、「それでも女か」同誌第37巻5号(1981年4月号)、「トシちゃん、正直に言ってくれてありがとう」同誌第37巻7号(1981年6月号)。「涙で答えてくれたマッチ」同誌第37巻9号(1981年8月号)、「マッチ、こんなファンがいることも知って」同誌37巻11号(1981年10月号)。
- 13) 「いいたいほうだい」前掲、「ヤングスクエア」(『明星』1981年10月号)。
- 14) 「3人組フォーエバー」「おもしろLAND」(『明星』1982年11月号)。
- 15) 「トシちゃん・聖子はカップルで」(同誌第37巻13号、1981年12月号)。
- 16) 「一体なんなのあの表紙」(同誌第38巻第1号、1982年1月号)。
- 17) 「オヤサンのコメント」同上。
- 18) 前掲、田島論文。
- 19) 「おまたせ、3カ月企画 たのきんと電話デート」広告文(同誌第38巻10号(1982年10月号))。
- 20) 「スターと電話デート 近藤真彦」(同誌第38巻第11号)。このシリーズは田原、野村も時期は異なるが、同じように実施されている。
- 21) 「ださい大人にゃなりたくない 近藤真彦・18才の夢」同上。
- 22) 近藤は「マッチでデート」(文化放送、1980年10月～1984年9月)、「近藤真彦 ベストグルーピングミュージック」(文化放送、1984年10月～1988年3月)などが代表番組であった。田原については、ラジオの方でも番組を持つ。「田原俊彦 8字のデート」(1980年 ニッポン放送)、「田原俊彦 ハロー! アイラブユー」(1981年 ニッポン放送)、「田原俊彦 グッドラック2ナイト」(同年、ニッポン放送)、「田原俊彦 誘惑トウナイト SHE! SAY! DO!」(1982年、ニッポン放送)、「田原俊彦 ひとつぶの青春」(1984年、FM東京)、「田原俊彦のダンシング トウナイト」(1988年、ニッポン放送)等多数行っている。
- 23) 「ぼくは野生児」同誌第39巻3号(1983年3月号)。
- 24) 「スターと電話デート 田原俊彦」(同誌第39巻第1号)。
- 25) 「スキーにアタック」同上。
- 26) 大晦日の歌番組であるNHK「紅白歌合戦」においても、田原は1980年～1986年まで7回の連続出場をはたしたが、1987(昭和62)年に落選している。以降田原は紅白歌合戦には出場していない。近藤は1981年～1988年まで8回の連続出場であったが、1989(平成元)年に落選し、7年後の1996(平成8)年に最出演を果たしている。
- 27) ブスっ娘クラブ委員長(オカメブタきょんこ)「ごあいさつ」(同誌第40巻12号、1984年12月号)。
- 28) 「ブスっ娘の道へのおさそい」同誌第41巻第1号、1985年1月号)。
- 29) 「ブスっ娘になるための過酷な10箇条」同上。
- 30) 「校則なんかぶっとばせ」同上。
- 31) 「編集部からのお知らせ」(同誌第43巻第11号、1987年11月号)。
- 32) 「ごあいさつ(平凡編集部から最後のメッセージ)」同誌最終号(1987年12月号)。
- 33) 「光 GENJI 平凡最後のニューアイドル『光 GENJI』はいきなりトップアイドルになった」同上。